

無器用な魔術師：創作

著者	壬生，一衛
雑誌名	龍南
巻	2 1 4
ページ	1 - 1 5
発行年	1930-07-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/6956

無器用な魔術師

壬 生 一 衛

「君の瞳は熟し切つた葡萄のやうだ。柔かな頬は、赤みがゝつた林檎よりも美しい。だが……唇だ。まるで、莓の色をつくりだ。——君の笑顔から受ける感じは、新鮮な果實の色彩のやうだ。」

フルツパーラーに集まる男等は、ルミ子の微笑を擱んだ機會に、卓の上に並んだ果實と雪分に見くらべて云ふ。

「男の方つて、みんな、さう仰言つてよ。」

わざと、『仰言つてよ』のアクセントを落すが、ルミ子は電流のやうな視線を男に注ぎかけながら、少女のやうな含羞を顔一面に浮べるのである。これは確かにルミ子の得意な魔術である。

「僕は君とお伽話のやうな生活がしてみたい。そして、毎日、君の真白い指が、林檎の皮を剝くのを眺めるのは、どんなに美しいことであらう。」

ある男は、廣い、庭園の真中に、赤い屋根と白いカーテンとを持つ小ぢんまりした住居を、詩で飾つてルミ子の心臓に訴へて行く。

——ルミ子は生活が愉快であつた。尊敬と讚美は、男の女に對する台詞ではあるけれども、戀愛と云ふものは、さう大して厭なものではないから。だから、無駄な食慾を感じてまで、このフルツパーラーに集まる男等に、ルミ子は王女のやうな誇らかな親みを感じた。

そして、『真白い幸福』を持つルミ子——それは、彼女が、處女である特權を、生活の隅々にまで、快適に純潔に弄ぶことは、

蟻のやうにたかつてくる男等に示す、大い魅力のピラミットであることも知つてゐる。それに、誰だつて戀愛を生活の餘興ほどに尊重しない今の時代、ルミ子とて、感情の駆引は老獃な支那商人より巧みなのである。

……然し、微温の熱情にうかされる男等も、ルミ子の幻は財布と同じやうにポケットに藏めて、相變らず彼女の微笑を吸ひとつて行く——

2

レコードが、ハワイアン・ギターの感傷を、蒼白な神経の戰慄するやうに、新鮮な果實の羅列の上に流す。人造大理石の卓は、五月の爽快な朝の空氣に光つてゐる。カーテンが、乙女の黒髪のをやうに搖れる。

ルミ子は窓に近い卓に、兩手で頬枕をついてゐた。彼女と向ひ合つた膨大な圖体の松田は、支那皿に盛られた林檎の斷片を、銀のフォークで突き刺しながら、生活の縮圖をルミ子の眼前に擴げてゐた。

——松田は、彼のバンクロフト張りの魁偉な容貌が、ルミ子によつて野蠻美と讚美されることによつて、自信づけた、求愛者の一人である。そして、彼には不似合にも、映画、スポーツ、詩、麻雀……等々の座談を社交人のやうに弄んだ。ルミ子の趣味は、完全に彼の鋼鐵の胸壁を風化してゐた。

然し、彼が、バンクロフトであることは、バンクロフトは常に戀愛の成功者ではないから、彼は不幸にも與えられた醜い武器をかざして、ルミ子との舞臺で、憐れな時代の踊り子にならなければならなかつた。詩も哲學も、そして、近代性もないこの和製バンクロフトは、人々が、美と善に愛想盡かした時の隙を獵犬のやうに覗つてゐた。これは、屢々近代人が甘美の反面に澁さを味はうとする本能の機微を、手際よく捌もうとしてゐるのである。そして、この陷阱は、誠に生活の斷片を樂むに適當した娛樂場である——

「この頃、君は全く憂鬱に見えるよ。丁度、魂でも賣つた人のやうにね。」

「ほんたう？」

ルミ子は頼杖を落して、驚いたやうに云つたが、

「憂鬱かも知れないわ。それ程、五月の香は、随分と私をなやませるから。」

「多角形な神経だ！」

松田はルミ子の銀線のやうな感受性を、冗談らしい歎置に吐き出した。

「だつて……でも……」

「それ程、憂鬱？」

彼は哄笑した。洞窟のやうな笑聲は、卓を越へて、ルミ子の微笑を誘惑した。

「からかつちや厭。」

ルミ子の^{シナ}姿態は、彼の感情を麻のやうに亂した。

——暫く黙り合つた。淡水のやうな薄い哀愁が蝕んで來た。機會はお互の心臓の中で、蛇のやうに爬狀を描いて頭を擡げた。

「僕は君に是非話したい事があるんだが、何時か、その機會を作つて下さい。」

然しこの時、二人の外國人が、若い女優を伴つては入つて來た。

「後でね——」

ルミ子は華奢な胡蝶のやうに、卓と卓の間を飛んで行つた。

3

新しく蓄音器が聲を絞つて泣く。

植物の纖維のやうに膚を細つた外國人が、片手でタクトを振つて口笛を吹く、洋酒瓶のレッテルのやうに飾つてゐる女優が唄

無器用な魔術師

ふ。

ホッフマン氏——東洋バラマウント支社長は柔和な微笑を撒き散らして、ルミ子に季節外れの高價な果實の注文をしてゐた。氏はビデネスのやうに四角であり、映畫界のしれ者であると同時に、道徳には封建的思想に固まつた舊教徒である。そして、男女間のキスは挨拶でさえも、顔をしかめるのだが、然し、五月の太陽は愛人の瞳のやうに輝き、五月の空氣は愛人のいぶきのやうにも愛いから、とりわけ、ルミ子の容姿は、氏の最後の愛慾を熱湯のやうに沸騰させるから、ホッフマン氏は、あらゆる生活の餘裕を誇張して、ルミ子の感情に糸を引いたのである。

話題は雜草のやうに蔓つてゐた。

馬鹿々々しい觀念の遊戲に疲れた松田は、それでも、ルミ子とホッフマン氏との會話をアンテナのやうに敏感に聞いてゐた。

彼はホッフマン氏の一片の微笑は、札束を反故屑のやうに捨てるのを知つてゐる。ホッフマン氏は戀愛までビデネスで押し通してゐる——彼は軽い憐みさえ、この好々爺に感ずるのであつた。それだけ、氏は彼に對する親み易いライバルであつた。

「君、歳はいくつ？、十六、それとも十七なの？」

「……」

ルミ云は眼で笑つてゐた。

ホッフマン氏は、トマトのやうな若々しい上氣嫌を浮べてゐた。

「お父さんはゐるの、それからお母さんは？兄弟はゐるの？」

「ひとりぼつちなの。」

ルミ子は女らしいセンチメンタリズムを、淡泊な憂鬱に包んで云つた。

(オフィス・ワイフにできないまでも、親しい友達として、この雛を手なづけて置くのはいい。)

オッフマン氏は戀愛を計算してゐた。

「明日でも、夕食をつき合つて下れない？ 都合が、悪い？」

「さうえ」

ルミ子はさう答へながら、

（年老いた従順な羊だわ。）

と松田に微笑かけた。松田は憂鬱になつた。

（俺は生活の鍍金師かも知れない。）

彼は暗然として、無恰好な上半身をそらせて立ち上がった。

ルミ子はカット・グラスに囲まれた果實を眺めてゐた、アツプル、オレンジ、ストローベリー、メロン、櫻んぼう、パイ、バナナ、……………色彩の氾濫である。ルミ子はそれ等各種の果實の風味を聯想した。

（何んと云ふ、すが／＼しい朝だらう。ほんたうに、私は幸福の洪水に溺れてゐるのだわ。）

ルミ子はテレスに目白押しに並んでゐる友に、輝かしい視線をなげかけた。

4

色彩と音調に亂舞する都會は、急速度に廻轉する。

林立したビルディングの山脈、舗道を流れる二筋の人波、そして、電飾の點線は處女の瞳のやうにまたゝき、車輪はアスハルトの上を輕快に滑る。

光の條網と音の煙幕——街頭シンフォニーに、都會の心臓は血壓の高い鼓動を續けてゐる。

興奮と刺激にまみれた感情は、街頭に、舗道に、ビルディングの窓に、刺刀のやうな感覺をみなぎらせる。

感觸の冷い夕暮である。

週報ユニウスの原稿とアリバイの銅版とを印刷所に廻してから、東浩二は人波に揉まれて舗道を歩いた。

脂粉と流行が渦巻いてゐる。微笑に崩れた談話、舗石を打つステツキ、靴の音……人々は生命を拾ひあげたやうに流れて行く。

人渦は雪崩れ、群集し、長い河を作つて續いた。タクシーとバスは、警笛を絞つて走る。

十字路で、ストツプの相圖に人々は足を止めた。向ひの舗道から、黒い瀑布のやうに人々は街路を渡つて行く。

彼はぼんやり群集の動きを眺めてゐた。

廣告塔、電飾の明滅は、散歩者の衣服を、青、赤、緑に變色させた。

暫して――

再び、彼は泳ぐやうに舗道を歩いてゐた。そして、彼の眼は瀟洒なワンピースのドレスを蹴つて急ぐ、ルミ子の背を射てゐた。人々は相變らず。饒舌の浪費と、無制限な感情の暴露に輝かしく歩いてゐた。

「何處に行つてゐるのつ？」

東は漸くルミ子と肩を並べると、彼女の晴々しい横顔を見て云つた。

「まあ、東さん、東さんだわ。」

ルミ子は發見でもあるやうに、表情にこぼれた叫びをあげた。

「素晴しく快活な散歩ですね。」

「えつ……え、とても愉快なの。それに、私、今宵招待されてゐるのよ。パラマウント支社長のホッフマン氏ね。あの人が、私を夕食に招待して下さつたの。」

「ホッフマン氏が……」

東は北叟笑んだ。彼は、ホッフマン氏の性格と思想と、そして、その二つによつて城壁のやうに固められた生活とを知つてゐ

る。そればかりか、この教育家のやうな氏に對して、多大な尊敬さえ拂つてゐるのだ。

「ホツフマン氏にしては、近頃珍しい思付きですね。」

「さうかも知れないわ。」

「フ………」

彼は妙な可笑しさを鼻で押へた。

——ルミ子は、東に對しては、常に人間としてのひけ目を感じてゐた。彼はルミ子に向つて容易に怒ることが、あつたし、辛辣な皮肉を頭から浴せかけもした。そして、彼はルミ子の前では、必ず專制君主であつた。

「急がなかつたら、お茶でも飲みませう。」

茶寮黒船の前に來た時、東は、人生でいつも機械体操をしてゐるルミ子をからかつて見なくなつた。

「まだ時間があるわ、お伴ませう。」

ルミ子は素直に應じた。

彼等は前後して黒船に入つた。

黒い薄絹のやうな闇の中に、卓の下から、壁の中から、地中から、淡い電燈の光が漂つてゐる。客は廢人のやうに踞つてゐる。しかし、憂鬱ではなかつた。部屋一面にみなぎつてゐる空氣は、壓力のやうに興奮を押しつけてゐた。

「僕は始めから君が好きだつた。勿論、別な意味でね。」

ミックスを掻きまぜながら、彼はルミ子の表情を窺つた。

「私もさうよ。」

「戀人ぢやなし、妹でもない。それと云つて、友達よりも親しい——」

「そんな愛情つて、あるわね。」

ルミ子は朗讀であるやうに云つた。

禮儀と親切の背後に野心を持つてゐない彼は屢々、ルミ子が、イロニーを以つて應ずる手管に、道化のやうな滑稽を感じた。ムツソリニーのやうに圖太い彼の神経は、ルミ子の光線のやうな感情を笑はうとした。然し、心臓で消化された衝動は、彼自身を嘲つた。

彼は狼狽と當惑の傷痕に、彼には嘗てなかつた苦惱の血が滲ちんだ。

「ホツフマン氏との約束の時間は何時？」

彼は話題を選択しなければならなかつた。

「六時二十五分、カフェー・リラ。でも、行かなくなつていいの。」

「行つた方が、いいですよ。ホツフマン氏の招待は、きつと君を喜ばせるだらうから。氏は至つて純情ですからね。それに、人一倍の禮儀の持合せがあるし、良い意味での立派のバトロンであり得るし……」

「もういい。行くわ。」

「馬鹿だなあ——」

東の冷靜はルミ子の焦慮を煙のやうに煽つた。

だん／＼二人は危険な空氣を感じ初めた。そして、遂には少年と少女のやうに、空々しい話題の圓周を循環した。たとえば、彼等は所謂、コンパニーなる親密なる愛情に心を裸体にしてゐたとは云へ……

「今度、ゆつくりお話したいと思ふわ。その時、散歩に行つて下さらない？」

「承知しました。」

彼は舗道より反響する雜踏に、無意味な注意を拂つてゐた。

彼等が、お互に軽い挨拶をして別れてから——

東は冷淡に聞き逃がしたルミ子の言葉が、磁石のやうにねばり強い吸引力を以て、魂を蝕んで行くのを感じた。が、ルミ子はホツフマン氏との約束に従ひ、カフエー・リラに向ふ途中、舗道に轉がつた戀愛を無數に拾ひあげて、明日の幸福を想像に弄んだ。

5

ミルクを溶かしたような淡い夢の霧――

その霧の中を、白い仔犬が、よち／＼轉んで歩いて來た。ルミ子は素足の心地よい感觸に浸つて、可憐な仔犬をあしらつた。

仔犬はマリのやうにルミ子の足の周圍で、飛びあがり、轉げた。そして、屢々、この仔犬は喜に狂つて泣いた。

やがて、ルミ子は白い仔犬を拾ひあげると、母親のやうに頼ずりをしてやつた。仔犬は前よりも激しい聲をあげた。ルミ子は何度も、何度も、仔犬の感覺がしびれるまで頼ずりをした。そのうち、ルミ子も泣けさうになつた。

よそから見れば、それは美しい繪に違ひなかつた。裸形の女が、白い仔犬に熱いキスをしてゐる繪であつた。

そして、この絶え間ない愛撫のうちに、ルミ子と白い仔犬の像がぼけて行つた。

ルミ子は柔かい寢臺の上に飛びあがつた。そして、理由なく泣いてゐた。

ルミ子は軽い食事を経てから、直ぐ東を訪問した。

「朝ばらから、妙な顔でやつて來るなんて縁起でもない。」

ルミ子は涙をたゞへた眼を動かさなかつた。彼は木像のやうに突つ立つたルミ子を部屋に招じ入れた。然しこんな場合、ルミ子に對しては、彼は裁判官のやうに冷淡であることに努めた。

「心配が、あるの？ そんなものは君には似合はないよ。」

（……二人は戀人であつてはならないのだ。）

東はシガレット・ケースを取り出しながら、ルミ子の窮愁に沈んだ顔を眺めてゐた。

「散歩に來たんですか？ 變に黙り込んでゐるんだね。」

彼はぐる／＼部屋を廻つた。

「ドライブに行きませう。ドライブに。」

ルミ子は突然、椅子から立ちあがつて云つた。それは、確かに激情の迸であつた。

「よろしい。」

かくて二人はドライブに出掛けた。

山と野は柔かい春の毛布を被り、道は青葉の匂であつた。

パツカードは輕快に朝の空氣を破つて、郊外の道路を走つた。」

ルミ子には稀なドライブであつた。殊に、田舎の展望はルミ子の策略に疲れた眼を喜ばした。

そして、意外にもルミ子は雲雀のやうに快活に騒ぎ廻るのであつた。

彼は魔術師のやうなルミ子の心が解らなかつた。然し、彼の心臓として、ルミ子と同じ熱度に温められぬ譯はなかつた。

「君が想像さえてゐない幸福を。僕は持つてゐるよ。少し小説的だが、然し、これは恐らく君の生活に、斬口のやうな新鮮さを與へると思ふんだ。」

「どんなこと？」

「まだ云へない。」

自働車は爆音と白つぼい埃を蹴つて走つた。

「君は早く結婚した方がいゝと思ふよ。」

「それが、私の頂く幸福？」

「さうじゃないけど……」

「サン・キュー、だが、相手がない。若し貴方だつたら、結婚してもいいと思ふことがあるけど。」

「冗談じゃない。僕は君のよい夫ではあり得ないよ。」

彼は煙草に一つの意味を與へて、撥き捨てた。

「私この頃、よく小さい時のことを思ひ出すのよ。夢の中でね、そして、泣くの、ほんたうに、私泣き虫になつたわよ。いろんな事に私の感覚は撥き返つて、私を悲ませるの。でも、淋いことはない。決して、決して、たゞ、悲むだけ、それだけのよ。」

「君は戀つて知つてゐるのかい。そんな事云ふと、僕迄が誤解するよ。」

「誤解したつていいわ。だつて、嘘の生活つて面白と思ふわ。意識的に嘘ばかり積み重ねて行く生活ね。……とても素的だと思ふわ」

「面白いのは君ばかりさ。僕……」

彼は思はず、彈丸のやうな感激を握りしめた。纏のない話の中心は、彼の感情の首を、思ひ餘つた力で緊めつけた。

彼は刺繍された烟を眺めわたした。

既にドライブは豫定のコースの歸り途であつた。

（たつた一つ残された機會——俺は、この機會に自分の全部を打ち明けやうか。若し、今日この儼別れたら、一生、俺は他人の幸福のために踏臺とならなければならない。）

彼はルミ子の話相手になりながらも、心の隅では、廻轉盤のやうに同じ命題を繰り返へしてゐた。

——少女風の印象を賣物にしてゐるルミ子は、眞實の愛の片鱗さえ、それは酬い愛慾の核を持つてゐるものと信じてゐる。若し、彼女の歴史を汚さない要求であれば、ルミ子とて戀愛の巡禮者となることを嫌ひはしないであらうが、人生に對して、天候のやうに氣紛な女は彼女だ。

(「ちえい、馬鹿にしてらあ——」)

春は野に轉んでゐる。

彼は、春は何んと無愛想な季節かと思つた。

6

公園の夜は、ガス燈の遮られた雑木と、低い芝生の傾斜の間を闇で埋めてゐる。

そこには、草の香が、たゞよひ、樹葉のいぶきの滑かな愛撫が斷續してゐる。

そして、魂のやうに人の眼より陰れた此處に松田はルミ子を誘つて來た。

——遂に松田は、例の尨大な肉体に比例した熱情を以つて、戀愛のABCから、すさまじい感情の委曲を物語つた。

「戀愛は人生の決闘です。僕はこの戦に、生命を賭してゐます。貴女だつて、僕のこの真剣は解つて下さるでせう。……僕と結婚して下さい。僕は貴女を幸福にしてあげる自信があるんです。」

「幸福になることは、いいことですわね。」

「だつたら、この結婚に同意して下さいませんか？」

ルミ子は靴先で土を蹴りながら黙つてゐた。が彼の結婚觀にけし粒ほどの好意を持つてゐない自分が可笑しくなつてゐた。

「私、結婚は早いと思ふわ。決して、これは私の我儘ぢやあないのよ。だつて今頃、十七そろでお嫁になるなんて、考へても滑稽ですわね。」

「約束だけでもいいんです。兎に角、不安定な僕の生活をどうにかして下さい。實際、貴女を失つた時のことを考へれば、僕は……全く死です。ほんたうに死です。」

彼は死が、いかにも容易であるやうに、平氣に熱狂して叫んだ。

「困るわ。そんなに興奮したら、私のやうな女は、解熱劑にもならないのだから。」

「貴女は僕をからかつてゐるんです。眞面目に話して下さい。いや冗談でもいい。結婚すると云つて下さい。」

ルミ子はこの雑木林が盡き、ガス燈の立つてゐる所までの距離が、彼の生命であることを考へてゐた。と云ふのは、恐らく光は、彼の無恥と非近代性を、僅かながら残つた自尊に訴へるであらうから。その時こそ、彼は後者のやうに早變して、パンクロフトになるであらう。

思ひ切つて彼を人形のやうにあしらつてゐたルミ子は、突然、東の無關心や冷淡を非よりも苦く感じた。

（あの時、冗談でも、嘘でもいいから結婚しようと思つたのに、あの人は、それが、ほんたうの雑談であるかのやうに聞いてゐた。あの時の私は今私に額づいてゐる河豚のやうなこの男よりも慘だつた。そして、あの人は、今の私よりも大膽に人生をやつた。）

ルミ子は蒸氣のやうな憂鬱を感じた。

「ほんたうを云へば、まだ私は結婚したくないの。その前に美しく朗かに青春を踊つてみたいと思ふわ。だから、貴方だつて私に結婚を申込む前、キスを要求なさるがいゝのよ。そしたら、私喜んでこの唇を貴方に提供するわ。」

ルミ子の言葉を遮つて松田の頑丈な兩腕は、まるで鐵鎖のやうに彼女の肉体を縛つた。唇を求めて喘ぐ呼吸の斷續は、醜い、だもの、のやうに二人を兇暴にした。

かくて――

自心を失つたルミ子は芝生の上に倒れたまゝ、覆ひ被さつた夜を睨んだ。

松田は棒のやうに突立つてゐた。

二人とも光の下には出られない程、下手な芝居を演じたのだ。

（もう、私は駄目だ。なんて、つまらない魔術を使つたんだらう。）

ルミ子は狂ふやうに泣き出した。

7

ルミ子は全く疲れた。住心地のよい場所とて、世の中にはさう澤山あるものではない。何處も戦だ。そして、何時も孤獨だ。管て時代が、興へた記憶を、ルミ子は一つの小さい鏡に反射させた——

それが、苦痛であり、悲慘であることを、ルミ子は清算しきれない感情の中に發見した。

東との交渉も薄明のやうに途絶えた。ルミ子の眼前に現れる者は、ホツフマン氏と松田の二人であつた。

東は生活を顯微鏡で覗いてゐた。さうせずには居られなかつた。そして毎夜、アルコールと女肉に溺れて極度の脳神經衰弱に陥つた。

カフエー・ナポリであつた。

ジャズの音符が狂ひ、貰と酒の雑色の香が人々の鼻孔を激しく刺戟する。空氣は薄く濁つて、觀櫻會の名残である五色のテープの彼方に、朦朧として浮び上がる人影は^{ボウフラ}のやうに搖れる。

華奢な女給の運動は、卓と卓の間を、客から客へと軽い快を翻がやす。

東は彼の群^{グルッペ}と強烈な洋酒を呷つてゐた。

「東が、例の雛を手に入れたとさ。さうだらう。」

「ほんたうかい。だが、彼奴は女は嫌ひだなんて云つてゐたくせに……」

「どちらだつていいよ。」

東は面倒臭く云つた。

「君には、もつと素晴らしい女が惚れると思つてゐたよ。しかも立人女がなあ。」

「有り難くもない。」

「大体に於て君は浮氣だぜ。シャボン玉みたいに。そして、至つて快活で上品だ。」
彼等の談論は眞赤に咲いた。

その間にあつて東は、ルミ子の唇や乳房の立体的陰影をはつきり感じた。

（俺はたうく、あいつに惚れてしまつた。）

東の默想は卓の上に、闇のやうな静さを誘つた。そして、これがカフェー・ナポリへの左様ならであることを、誰もが直感した。

「歸らうぜ。」

間も無く、彼等の一團は半身をよろつかせて、カフェー・ナポリを出た。

それから一時間の後、東は陰鬱な空氣に沈んだ魔窟を、野良犬のやうに漁つた。

植物の標本のやうな水膨れの顔の羅列、彼は益々憂鬱になつた。

（たつた一つ残された機會を失つた俺だ。）

東は感傷に傷つた。

赤色に沈んだ電光が、彼の瞳でぼけた。激しい熱情の餘燼が、失望に似た影を踏んで襲つて來た。

彼は走り出した。そして、再び、だるい肉體の苦痛に眼覺めた時、彼は傍に屍のやうな女の肉體を發見した。

丁度その頃、ルミ子はホツフマン氏と共にホテルへ自動車を走らせてゐた。

ルミ子も泣いてゐた。ルミ子はそつと外を見た。

深夜の都會は、行軍に疲れた兵士の一隊のやうに動いてゐた。灯が落ちた。それは舗道に長い光を流した。
のろ／＼と移動する都會、その都會の心臟の上に廣告塔が勢よく明滅した。